

思はぬ出会ひ（犬塚孝明・石黒敬章『明治の若き群像—森有礼旧蔵アルバム』）

一九世紀前半に写真が発明され、簡便かつ精密に人や物の姿を撮影することが可能となった。その後、ペリー艦隊により持ち込まれた写真は、「西洋文明」を象徴するものとして、日本人に受け容れられた。例へば、薩摩藩主・島津斉彬は家臣に写真の研究をさせ、自らモデルとなつてゐる。

当初の銀板写真は一回の撮影につき一枚しか現像できなかつたが、ネガ・ポジ法が考案され、焼き増しが可能となると、人々は写真を交換・蒐集し始める。一八六〇年代の英国では、「カルト・ド・ヴィジット」と呼ばれた名刺判写真が流行し、「カルトマニア」と呼ばれる蒐集家向けに特別なアルバムが製造された。さらに、百冊以上のアルバムを所有する「カルトマニア」であつたヴィクトリア女王が火付け役となり、「カルト」ブームは国際的な広がりを見せたといふ。

一八六五年からロンドンに留学し、「『人間』を通して文明世界を知り、精神の転換を図ろうとした」森有礼も「カルト」の虜となり、五冊のアルバムを残した（現在は、石黒氏が所有してゐる）。その中には、森と直接的な関わりを持つた人物のほか、ヴィクトリア女王一家やH・スペンサーなど欧米の同時代著名人、ナポレオン一世や楠正行など東西の歴史的英雄、さらには無名の庶民や情趣に富む風景など、数百枚の写真が収められ、たゞ眺めてゐるだけでも飽きが来ない。加へて、これらの写真は（巻末の「人物・事物紹介および索引」を併せ）史料としても価値があり、全てを掲載した本書の意義は大きい。

個人的に最も興味深かつたのは、一五二頁下段に掲載された金子弥兵衛（二五歳当時）の写真であつた。評者は、こゝ一〇年ほど、曾祖父の兄にあたる弥兵衛（彌平）の事蹟を調査してゐる。結果の一端は、本誌（平成一四年三月二二日付）の連載・『ニュー・エイジ登場』でも紹介してをり、その時に晩年の写真を掲載させて貰つた。しかしながら、若き日の写真を見たことはなかつたのである。思はぬ出会ひの機会を作つてくれた本書に感謝したい。

だが、弥兵衛の「人物紹介」（二七九頁）に誤りがあるので、この場を借りて訂正させて頂く。まず、森に随行して渡清したのは、明治八年の公使着任時ではなく、翌九年の再渡清の際であり、帰国したのも森の退任と同じ明治一一年ではなく、翌一二年の末である。また、外務省を辞して実業家となつたとあるが、外務省を辞めたのは、清から帰国した直後のことだ。その後、大蔵省や台湾総督府に勤務し、実業界に転身した。詳しくは、『明治聖徳記念學會紀要』（復刻四二号）所収の拙稿を参照して頂きたい。

それにしても、「文明の紙幣」とも評される「カルト」を見ながら、森は何を考へてみたのだろうか。犬塚氏は、そこに森の「思想」ならぬ「視想」を見出さうとする。

森は、社会を進歩させる主体としての「人間」を重視した。優れた人物の写真を集め、自らを鼓舞してゐたらしい森は、外交官として日本人留学生達を積極的に援助し（留学生の写真も目立つ）、初代文部大臣として文教行政に大きな足跡を残すなど、「人間」の育成に力を尽くした。けれども、それが仇になつたと云へるかもしれない。森は、伊勢の「神」を蔑ろにしたといふスキャンダルを捏造され、命を落としたのであつた。

そんな歴史の皮肉に思ひを馳せつゝ、評者は改めて森の写真を眺めたのである。